海で三番目につよいもの

久間十義

新潮社

海で一番目によいもの

久田十義

新潮社

海で三番目につよいもの

著者◉久間十義

© Jugi Hisama 1993,
Printed in Japan

発行　一九九三年四月二〇日

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
162　東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（03）三二六六—五一一一
編集部（03）三二六六—五四一一

振替　東京四—八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-391801-2　C0093

価格はカバーに表示してあります。

海で三番目につよいもの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

僕は地下鉄を手なずけねばならなかった。というのもそのころ、僕はすべてに不慣れで覚束なげだったが、地下鉄はそんな僕を有無をいわさず暗い穴ぼこに押しこみ、見知らぬ場所からもう一つの見知らぬ場所へと無造作に放りだすように思えたのだから……。

——金世光

1

そう、そのころ——つまり一九七五年の春。こう言ってよければ、ぼくは確かに地下鉄を手なずけなければならなかった。

ぼくはそのとき十八歳。その春、志望した大学の入試に失敗し、上京して神田の予備校に籍をおいた。そして右も左もわからぬ東京で一人暮らしをはじめたからである。

雑司が谷に六畳一間とトイレ・台所つきの部屋をかり、そこと予備校の二ヵ所を地下鉄で往復する毎日。最初のひと月は無我夢中のうちにながれさった。

はじめぼくは驚くほど勤勉だった。十八歳の自分にあたえられた現実はただひとつ、受験のラットレース。それ以外はいっさい無関係だ。かたくなにそう思いこんで、高校時代の友人たちとの接触もさけ、黙々と銀色の地下鉄に乗りこんだのを憶いだす。

たぶん猶予された者の感じる過剰な慰みの意識が、ぼくの生活を律していたのだろう。世の中の出来事いっさいをこちらのほうから排除して、そのじつ、自分がそれらから排除されていることを忘れる無意識のつじつまあわせ……。ぼくは外界に対して隔壁をめぐらし、一人ぼっちのひそかな充実を感じていたのだ。

ミッキーと出会ったその日も、だからぼくは帰りの地下鉄でせっせと英単語帳を

繰り、それが終わって新聞をひろげながら、そこにのった出来事を一種の絵空事のように眺めていたのだと思う。記事がどんなことを伝えていようと、しょせんは自分のあずかり知らぬ他人の〝現実〟ではないか――、とそんなふうにかんがえて。

*

新聞の一面トップが伝えていたのは〝狼〟たち――つまり、三菱重工ビル爆破をはじめ、十一件にのぼる企業爆破事件をひきおこした犯人グループが逮捕された、という報せだった。反日武装戦線を名のり、虐げられた東アジアの民衆にかわって資本家どものビルに爆弾をしかけた極左テロ集団の男女たちが、大きな顔写真入りでのせられていた。

彼らが何をかんがえ何を実行しようとも、また人々がそれをどのように告発しようとも、ぼくにはいっさい無関係。そう割りきったつもりで記事を読みながら、しかしぼくは奇妙な昂ぶりに胸がしめつけられるのを感じた。顔写真の彼らの目には憎悪がむきだしだった。それが彼らを断罪する「爆破集団の歪んだ青春」とか「強

い自己顕示欲」という紋切り型のリードとあいまって、不思議にぼくをそわそわと落着かない気分にさせているのだ。

地下鉄をおりて地上へとむかう階段を上がるときも、この昂ぶりは去らなかった。ぼくは理由がわからず、何だかムキになって勢いよく階段をかけのぼった。——だが、そうやって出口へむかいながら、ぼくはもう自分一人ではおさまらない、他人と共有する〝現実〟に一歩、一歩、近づいていたらしいのだ。階段をのぼりきった刹那、それにぶつかった。

*

それは一瞬、黒いちいさな影のように視界に入り、勢いよくぼくに突きあたってきた。そして弱々しい緩慢な動作で、びしゃりとアスファルトの鋪道にたたきつけられた。

——大丈夫？　けがはない？

あわてて抱きおこしたぼくの腕の中で、ちいさな男の子が毀(こわ)れたヴァイオリンの

ようにくずおれていた。

2

――大丈夫？

夢中になって抱きおこしながら、しかし、こわばった男の子の身体に、ぼくは奇妙な重さを感じていた。どう言ったらいいだろう？　ズシリと重いようで、それでいて軽い、不思議に重量のさだまらぬ感じ……。男の子は胸をつよく打ったらしい。息ができずに青ざめている。その子の背中をさすりながら、ぼくはうろたえ気味の視線を周囲にめぐらせた。

鋪道の上には、ぶつかった拍子にぼくのポケットからこぼれ落ちたのだろう、小銭があたりいっぱいに散らばっていた。街路樹をすりぬけた午後の陽射しがゆらゆらと路上を漂い、突然、何かに触れたようにピタリととまる。急に世界がぼくと男の子の何メートル四方かに収縮するような、そんなおかしな感覚におちいりそうに

なり、ぼくは思わずその子の身体をつよく揺すぶった。
「……お兄ちゃん、苦しいよ。そんなにつよく揺すらないで」
気がつけば男の子が身体をねじって、口をひらいていた。弱々しいが、はっきりとした口調だった。ぼくはホッとしてその子に微笑みかけた。そして、たぶんそのときだったと思う。その男の子が青い目と、彫りの深い顔立ちと、ブロンドにちかい栗色の髪の毛をもっていることに気づいたのは……。

*

「お砂糖とミルク、おつけしますか？」
五分後、ぼくは男の子の手をひっぱって、近くのハンバーガー・スタンドの中にいた。赤い制服を着た顔じゅう雀斑(そばかす)だらけのウェイトレスからミルクセーキと珈琲を受けとり、二人いっしょに通りに面した明るいテーブル席に腰をおろした。
「お兄ちゃん、ありがとう。ボク、これ好きなんだ」
男の子はすっかり気分がよくなったらしい。ジュルジュルと音をたててストロー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をつかいながら、彼は母親が日本人で父親がアメリカの兵隊さんであることや、ふだん自分がミッキーと呼ばれていること（本名は美樹夫という名前なのに、母親が好んでそう呼ぶらしい）、つい最近沖縄から引っ越してきたこと、などをちょっぴりうわずった調子でにぎやかにしゃべった。

「で、お兄ちゃんの名前は？」と男の子はぼくに訊いた。

「ぼくか？　ぼくは洋一というんだ。洋は太平洋の洋、一は一番の一。だから海で一番つよいっていう意味だぞ」

「ふうん」

「でも、まあ、海で一番つよいのは、たぶんきみのパパたちさ。アメリカの海軍は世界一だからね」

なぜか男の子に対してちょっぴりへつらうような、そんな科白（せりふ）を口にしたとき、だが、彼の反応は予期していたものと違っていた。ミッキーは寂しげに首をふったのだ。

「ううん、違うよ。パパはもういないんだ。ベトナムで死んじゃったから……」

ミッキーの頬をウインドーごしの五月の陽光がやわらかく染めていた。ぼくらの

席に氾濫するその明るい陽射しのなかで、ミッキーの顔が一瞬輪郭をうしなったように感じられる。きまずい予感のようなものが走って、ぼくは居ずまいを正した。もちろんこの時点では、彼とぼくの間でいったい何が起きようとしているのか、ぼくはまるで理解していなかったのだが……。

3

翌日、ミッキーは地下鉄の出口でぼくを待っていた。べつに約束していたわけではない。前日、ハンバーガー・スタンドのまえで別れるとき、じゃあまたね、と言っただけだ。ところがミッキーは待っていた。それも偶然ばったり出会ったふうをよそおって、コーデュロイの半ズボンに両手をつっこみながら。

「こんにちは、お兄ちゃん」

「ああ、こんにちは」

ぼくの挨拶はけっして上機嫌のそれではなかったはずだ。

「いま帰ってきたの？」
「そうだよ。これからスーパーマーケットに行って買物をして、すぐアパートに帰って、それからお勉強をしなきゃいけないんだ」
「忙しそうだね」
「うん。とびきり忙しいよ」
ミッキーはちょっとうつむいて、しらじらしくありもしない小石を蹴るまねをした。おもむろにあげた顔につい、と懇願の色が浮かんでいる。ぼくはその目つきに少し気弱になった。
「……スーパーについてくるかい？」

＊

スーパーでぼくはインスタント食品やティッシュ・ペーパーを買いこみ、ついでに思いたってミッキーのためにキス・チョコを籠に入れて、レジスターのまえに立った。ミッキーは横にぴたりと寄りそって、五千円札を一枚、レジ係に渡すぼくを

見ていたはずだ。

レジの女の子は細くてきれいな指をしていた。百回レジに通いつめても出会えずに、百一回目になってはじめてお目にかかれるようなそんな指だ。透明なマニキュアをほどこしたその指先が、ピアノの練習曲でも弾くみたいにリズミカルにキーを打っていた。

ところが滑らかに動いていたその指先が、おつりを返してくれる段になってピクリとふるえた。同時にアッと息を嚥(の)みこんだ気配もする。ぼくはレジ係の顔を覗(のぞ)きこんだ。

レジの女の子も大きな瞳でぼくを見返していた。額がちょっと狭いようだけれど、すっきりした目鼻立ちの勝気そうな娘だった。たぶんぼくとおなじくらいの年齢なのだろう。ポニーテイルがぴったり似合う、まだ少女っぽさの残った顔に酷薄そうな笑みが浮かんで、すうっと消えた。

「どうかしましたか？」

訊ねるぼくに彼女はけれど、打消すように首をふり、黙ってレシートとつり銭を

押しつけてきた。そしてすばやく後ろに並んでいた客の籠をひきよせると、もうれつな勢いでレジスターを打ちはじめた。ことさらにぼくとミッキーを無視しているみたいなのだ。ぼくはムッとなった。からかわれたような気になり、わけがわからないまま、急きたてられるかっこうでレジを離れねばならなかった。

もっともスーパーマーケットを出ると、レジ係の不作法なんてすぐに忘れた。その日も五月の上天気だったし、街路樹をわたる風には微かに甘い花の香りがこもっていたからだ。ぼくらはのんびりと鋪道を歩いていった。四、五十メートルも行けば通りは三叉になっていて、鋪道から矩形にコンクリートの陸橋がかけわたされているはずだ。

その陸橋のてまえで、ぼくはミッキーと気持ちよく別れようと思っていた。歩きながら、あれこれ彼と別れるための上手な言葉をさがした。しかし、どうやらそんな必要はなかったらしい。

「ちょっと待って！」

ふりかえると、急いであとを追ってきたのだろう、レジの女の子が息を弾ませな

がら立っていたのだから。

＊

きついまなざしだった。彼女は意味ありげにぼくとミッキーを見つめ、尊大に腕を組んだ。

「なぜ呼びとめたか、わかるわね？」

レジでの対応といい、この言葉といい、どうも合点がいかなかった。いぶかしげに首をひねると、彼女の声がいらだった。

「とぼけるのもいい加減にして！」

もっとも、自分でもその声の棘々しさに驚いたらしい。ひと呼吸おいてしゃべりはじめたとき、彼女の語気はずいぶんとやわらいでいた。

「わたしが言いたいのはこれよ……」

ゆっくりとミッキーの腰のあたりを指さした。

見ると、彼のズボンのポケットが両方ともぱんぱんにふくれている。当のミッキ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com